



<掲載記事>

○平成26年度 野菜関係

「普及する技術」及び指導参考資料

○トピックス

- ・山下総括研究管理員、地域貢献賞受賞
- ・平成25年度野菜研究所成果発表会

平成26年度野菜関係「普及する技術」及び指導参考資料

平成25年度までの試験研究成果の中から、下記の6事項が「普及する技術」及び指導参考資料として取り上げられる予定となっています。詳細な内容については、26年度になってから(地独)青森県産業技術センター農林総合研究所のホームページをご覧ください。

○「普及する技術」

イチゴ「なつあかり」の春定植栽培における増収のための長日処理方法

イチゴ「なつあかり」は良食味ですが、連続出蕾性の弱さから年次や時期により収穫量の変動するため、安定多収となる生産技術が求められていました。一方、四季成り性イチゴ品種は長日条件により花芽分化・発達が進められることも知られていましたので、この点について研究を重ね、「なつあかり」の春定植作型の夏秋どり栽培における増収のための長日処理方法を明らかにしました。

○指導参考資料

イチゴ「なつあかり」当年苗の花芽分化・発達に及ぼす温度の影響

イチゴ「なつあかり」の当年苗を利用した秋以降どり作型における、花芽分化・発達に及ぼす温度の影響を明らかにしました。

ヤマノイモ品種「つくなが1号」における伏込み催芽による増収効果

ツクネイモとナガイモの交雑で育成されたヤマノイモ品種「つくなが1号」は、ナガイモに比べて萌芽が遅く収量も低いのが欠点でした。そこで、切りいもからの成いも生産及び切片からの子いも生産において、植付け前の催芽処理が萌芽期や新しいも肥大に及ぼす影響を見たところ、その効果が明らかとなりました。

ニンニク収穫後のシート乾燥における吸引式テンパリング乾燥時の仕上がり判断方法

ニンニク収穫後の乾燥仕上がりは、平成15年指導参考資料で盤茎部水分含量で10～15%としていますが、吸引式シート乾燥では盤茎部水分含量が17～18%と高めで平衡となります。このため、吸引式シート乾燥を採用した現地で、盤茎部水分を15%に到達させようと乾燥を延長したり高温乾燥を追加したことによると考えられる氷点下貯蔵時の品質低下が散見されました。そこで、吸引式テンパリング乾燥用の乾燥仕上がり基準を新たに策定しました。

ニンニク乾燥りん球の保管中の盤茎部水分変化と保管上の留意事項

これまで、ニンニク乾燥りん球の盤茎部水分含量は、10～15%で乾燥が仕上がっていると判断し、その後保管する場合もこの基準を守ることとされてきましたが、生産現場から「水分が戻る」現象が指摘され、その要因は不明でした。そこで、りん球を乾燥状態が異なる場所に保管する試験を行い、環境により盤茎部水分含量が変化することとその要因を明らかにし、保管上の留意事項をまとめました。

ニンニクのイモグサレセンチュウに対する土壌くん蒸剤の畦内処理前の深耕効果

ニンニクのイモグサレセンチュウ被害が多発するほ場において、畦内処理による土壌くん蒸消毒を深耕と組み合わせて行うことで、イモグサレセンチュウの被害が低減される効果が確認されました。

トピックス

山下総括研究管理員、地域貢献賞受賞

日本植物病理学会東北部会（25年10月28、29日に秋田市で開催）において、当研究所の山下一夫総括研究管理員（病虫部長事務取扱）が、「地域特産作物に発生する植物ウイルスの分離・同定および植物ウイルス診断キットの開発と実用化」の功績によって、日本植物病理学会東北部会地域貢献賞（平成25年度）を受賞しました。ニンニク、ナガイモを始めとする特産作物のウイルス病に関する長年の研究と地域産業への貢献が高く評価されたものです。



平成25年度野菜研究所研究成果発表会

2月26日、本年度の研究成果発表会を開催いたしました。

当研究所からは、「四季成り性イチゴへの電照について」（栽培部・伊藤研究員）、「ヤマノイモ「つくなが1号」の特性と栽培法」（品種開発部・落合研究員）及び「深耕後の土壌くん蒸剤消毒マルチ畦内処理によるイモグサレセンチュウ防除」（病虫部・對馬主任研究員）の3課題について発表いたしました。また、農林総合研究所施設園芸部の今井部長と齋藤主任研究員が、「寒冷地でも植物工場経営が可能か・・・葉菜類、夏秋イチゴ＋冬春トマト」と題した発表を行いました。

当日は、関係機関や生産者等約75名の参加があり、今後の研究の参考となる多くのご質問やご意見をいただきました。

